

出張報告

XXI. World Congress of the International Association for the History of Religions (国際宗教学宗教史学会第21回世界大会)

2015年8月23日から29日にかけて、ドイツのエアフルト Erfurt において XXI. World Congress of the International Association for the History of Religions (国際宗教学宗教史学会第21回世界大会) が行われた。研究所より井上順孝所長、平藤喜久子、星野靖二、また客員教授である林淳が参加した。以下、星野が概要を報告する。

国際宗教学宗教史学会 (IAHR: International Association for the History of Religions) は、宗教研究の国際的な展開を促進することを目的とする学会である。個人単位ではなく様々な国や地域における宗教研究の学会が、学会単位で参加する形で構成されており、現在48の国と地域における宗教研究の学会・協会が加わっている。日本からは日本宗教学会が同学会に加盟している。近年は基本的に5年に一度世界大会を開催しており、2005年に東京で第19回大会、2010年にはトロントで第20回大会が開催された。なお、日本では1958年に第9回世界大会が開かれている。

今回大会の開催地であるエアフルトは、ドイツ中央部に位置するテューリンゲン州の首都で、フランクフルト空港から特急電車で2時間半ほどのところにある。かつては東ドイツ領であったが、現在では中世ドイツの趣をよく残している街として知られているという。エアフルト大聖堂は観光地にもなっており、日曜礼拝に参加する機会を得たが、多くの出席者の中には、おそらくは旅行者であろうと思われるような人々も見られた。

大会の主要会場となったエアフルト大学には宗教学部に加えて、マックス・ウェーバー



エアフルト大学正門

高等文化社会研究センターがあり、ドイツにおける宗教研究の一つの有力な拠点となっている。なおマックス・ウェーバーは同地の生まれである。

大会の共通主題として「宗教のダイナミクス：過去と現在 Dynamics of Religion: Past and Present」が置かれ、その下に「社会の中の宗教コミュニティ：適応と変容 Religious Communities in Society: Adaptation and Transformation」、「実践と言説：革新と伝統 Practices and Discourses: Innovation and Tradition」、「個人：宗教性・スピリチュアリティ・個人化 The Individual: Religiosity, Spiritualities and Individualization」、「方法論：表象と解釈 Methodology: Representation and Interpretations」という4つの分野が設定された。大会全体を通して、多岐にわたる内容の370を超すパネルが開催され、様々な国から来た研究者たちと交流を深める良い機会となった。

以下に、研究所スタッフが報告したパネルの概要を記す。

8月24日(月)午前中に平藤喜久子を代表とする Religion and Education in the Age of Globalization: The Attempt of Education in Religious Culture in Japan (「グローバル時代における宗教と教育：日本における宗教文化教育の試み」)というパネルが行われ、井上順孝と平藤喜久子が報告した。このパネルは現在日本で行われている「宗教文化教育」について、グローバル化に伴う社会変化などに対応するための新たな試みであることを紹介し、更にその社会的な位置と意義について国際比較を試みるものである。報告者と題目は以下の通りである。



「日本における「世俗化」再訪」パネル終了後の様子

- (1) Kikuko Hirafuji 平藤喜久子 “Myth education from a global perspective” 「グローバルな展望における神話教育」
- (2) Yoshihide Sakurai 櫻井義秀 “Religious Diversity and University Education to Prevent Cult Problems” 「カルト問題対策のための宗教的多様性と大学教育」
- (3) Nobutaka Inoue 井上順孝 “Religious Culture Education Seen From Global Perspectives” 「グローバルな視点から見た宗教文化教育」
- (4) Birgit Staemmler: “Comparing Religious Education in Globalizing Germany and Japan” 「グローバル化するドイツと日本における宗教教育の比較」

また、8月27日(木)午後Orion Klautauを代表とする Revisiting ‘Secularization’ in Japan: A Historical Perspective (1850s-1890s) (「日本における「世俗化」再訪：歴史的視座において(1850年代から90年代にかけて)」)というパネルが行われ、林淳と星野靖二が報告し

た。このパネルは「世俗化」を言説論的に問う視座を前提とし、近年の「宗教」概念論を踏まえた上で、「世俗化」がどのように用いられてきたのかをあらためて歴史的に問い直そうとするものである。報告者と題目は以下の通りである。

- (1) Kiri Paramore “Secularism not Secularization: The Interactivity of Modern Ideologies of Religion between China and Japan” 「世俗化ではなく世俗主義：中国と日本における近代の宗教イデオロギーの相関」
※ Paramore氏は体調不良のため参加することができず、チェアマンのOrion氏がペーパーを代読した。
- (2) Makoto Hayashi 林淳 “Asylum Practices and the Dissolution of Priestly Status in Modern Japan” 「近代日本におけるアジールと僧侶身分の解体」
- (3) Seiji Hoshino 星野靖二 “Considering the ‘Religious’ and the ‘Secular’ in Meiji Japan” 「明治日本における「宗教的なもの」と「世俗的なもの」の検討」

Respondent: Trent E. Maxey

(星野靖二)